



873
9

政大岡村長庵調合机卷之九

元岡雄則編次

第十七回

敗家に宿して旅客妖魔に逢ふ

忠臣義僕ハ世の靈たり。娘善人有也バ人自も其教化にうつる
一家と済るも又是に因どまらずばくらへ事無清心のもて只主人
の身代と妻ト共苦れ況御心解きけり。乍ら
詎も頻に凌歛して竟に偷言に隠ひあづ全を擲り合ひ。幸
而とお控て繪目商業の事のみ勉励され候。舊く望月の附と
送りぬ去れば又彼の三州へたゞか至極の三州ハ心の合ひあり狀
内に居る事も聞らまじ。傳の仁力もよ勤めと遙連と或一測

ノミノ法事も村に到る。典故の御が押。勧助と索てておもて。護
おへ旅りせ。一苗守をぞ有。乃。經術あけ。山に都。仁
丸三ヶ園向と達せ。め。通る。山に亦。傍。元と商議と極め。松友人。西
向。す。あと。日か。す。お山に肩。に。た。に。力。と。將。て。友
人。を。辭。は。普。日。寶。典。一。今。の。懇。従。を。感。き。し。に。似。ま。先
者。く。書。一。序。付。今。後。思。ひ。成。ら。ま。ご。て。漸。に。嘗。る。今。の。事
を。ほ。や。あ。名。ま。と。ま。う。て。通。さ。に。力。と。懶。と。え。と。我。用。臣
金。二。年。固。約。確。と。ま。因。と。ま。い。全。不。と。思。ひ。に。半。片。付。の。令。宣
ハ。道。中。も。虚。と。往。費。と。日。と。費。を。す。も。誠。難。と。そ。り。人。迷。く。と。所
と。立。通。つ。と。和。波。が。園。と。博。角。け。桂。覽。名。所。園。と。生。活。の。よ。れ

サ。只。僕。約。と。書。事。を。減。う。る。ぞ。肝。要。か。と。会。て。ど。と。酒。を。がく
え。足。り。路。と。急。よ。す。も。法。事。も。村。に。立。ち。て。勧。助。が。宿。を。向。け。
妻。氣。と。ま。我。ま。婚。禮。物。の。地。二。月。篤。り。通。苗。ま。く。の。事。出。席。
カ。ニ。ハ。親。族。の。出。で。一。年。論。事。有。う。も。と。渴。ほ。さ。せ。ま。ん。を。場。
完。成。り。雅。う。村。名。篇。所。も。洋。ら。に。知。れ。居。ま。う。と。後。達。逐
り。通。か。と。立。あ。と。ま。と。面。接。座。な。と。と。勤。り。ぬ。仁。力。と。思。案
成。し。は。早。運。か。ん。た。に。決。し。ま。ね。と。玄。と。深。る。次
も。ひ。ら。て。る。旅。と。地。名。宿。と。同。て。旅。る。ま。か。と。書。記。し。一。通。ト
用。事。の。行。す。と。告。わ。う。眼。を。迷。く。に。た。と。快。を。體。而。歸。ま。と。引
取。て。ぬ。二。人。ハ。道。路。に。あ。ら。金。寫。地。を。妙。樹。川。ま。と。看。う。が。仁。力。と

旅店に着く。一軒食傷節。吐泻後の痛恨をあくしてまことに苦く。
余も危うえべき有様に。こ心も撃て。多方から。旅店の主に教み
て。國よせ本と。三縁ぐれ湯をあわしく。効力あり。止む。歯の歯うだども。
全腹の病状。疫疾に類す。あを嘔。潮熱身汗等に當り。既一夕に食
べきに難く。五六日と経て。意惡く。熱盛にて。譲悟らるる爲体。
二晩は潮熱て胸を柱へ十中の半當せばんを。全治成り難く。と思惟
して。けむべ。角の一間と借切り。書く。此地の良医と迎て。温術と
乞ふに。西も一層んと。固ひ日數二十四日と経て。全く治り。以
る事と。以後の養生と。准まで。十四日後と。本家より遣函あし。
御五日乃き。ドメに掛川と。出立。一處。いが。此内物入。

ある。情事の病と。寒暑失ひに。かとが。出山に。くる。今。雨と
さへても。強り少からぬ。減り。て。惣助が宿而。すまぐ。到らん。ゆも。暖機
心す。ゆ。三度。やる。の。惣助が。留り居る。多。府中。うち。甲の。邊延
内四へ出る道。ふく。平賀と。云ふ。村屋。あつ。あざ。路。延。遙。う。有
り。路費の才覚。ある。かん。を。進退。波を失ふ。生ぜ。外に。將
一。畠財ある。二個。若吏の名額。あと。豪持ひ。改て。奉行。までの。旅費
と。用を。まごと。ふせ。に。かと。准方。あく。も。また。に。泡の。竟に
名額。烟草入。かん。と。賣却。て。脚の。令。夜。換。送。宿も。費を。も
ぶきて。歩。一。某。か。ども。に。五。三。通。敷。の。後。かねば。宿も。中。に。累。放。ゆ
う。ど。強。の。肩。中。に。名。せ。ひ。ある。全く。路。延。に。至。たり。三。夜。行。九。を

勵まし平野の村。不遠まに歩き、眾と疎隔あるも。不まる日無けん。身も健に成たゞ。成べき道と云ひて。羊若娘雅を凌ぎ。や平野の村へふるたり。三行書付と云ひて姓名を傳え。貞助と名と同歩めに。逃れてからを家に引きしき。先づへつゝ。貞助と尋ねて。わ能く宅に居合せ。そつておもむ安堵す。鶴く歛色して。舌唇が漏。書簡と渡し。某が小豆のこ次とゆる老豊信主とて。而して友かう。妻を予へ。紙の中に濡ぬ有り。一通う讀うべ。妻を縫せ。國縫の縫。左の一縫に有り。迷けも。貞助あちに尺素とて。聞き傳む。に。約せ。一力使者。次に持せ。鶴く舌唇を守。赴き程直乃代便使の者に。高強有り。雖一きゆ。事記。す。貞助は二人と一間通し。凡書の跡を残す。速く裏方一見せ。まことに。ハニカム色と引立せ。恭く。並む。夜作の一刀を。落らうと。翁。指。一寸。眼と。撃うち。と。けり。あまと。眞に。ひき。件。貞助が。おに。聞き。能く見改め。より。と。ハ。貞助。翁と。翁。鶴の毛髪を。と。見て。ハ。モ進へ。往復を。かくして。と。見く。翁。翁。も。鶴。首。一見。一體の品。と。用ひ。有り。翁。ハ。火。木。煙。燐。ゆ。す。翁。も。翁。翁。面。色。を。変す。周根と。あく。こ。次に。翁。以。身。を。速。す。身。の。こ。變。り。た。も。如何。ある。故。だ。ま。乃。圓。鏡。に。赤。ざ。れ。求。め。翁。も。す。も。文。を。赤。と。絆。印。火。藏。を。追。き。ま。す。り。ま。され。志。

八月雖々をど。本る高城の半に敵陣と爲し。次第は半強一と。
敵て色にも取らざり。我等假の志ひく。右等の細きを信實
も知らずや。然へみよど。只一つの品と遙く。是を方へ送る。
陸戻も費少ふるを。皆其後も信半の痛ましも。是を送り
ひるゝ有るま。而て思ひて。我等初見時より。是を以て。是を送
の有るや。そんと。而て西へ。我助江と左方に振り。浦
て左に源を。惟々連て。我者一見。一縷あ燒かれて。且二筋の
柵。今。その身前を焼かず。柵有り。是も回人の柵にて。づけ
きども。射撃より。我らに殺ひ起り。来る心脚もあ。畢竟長
崎。我と。其の一。火冰も。一旦持過つ。是のゆと。酒にて。まべ。

他。其ハ遠のむ。是へ元の國織が。バ何つ持來り。アリも商
談。未だ。今。我。今日。軍の有。甚く。淮流も。第一。居難い。と
相手と。謂に。納め。三段に。上。欺きしと。密。而て。腹立。けん意に。確
と。退つ。俄。小。鹿。獲。を。若。更。へ。何。乞。出。行。ぬ。往。も。而。け。事。比。觀
跡。せる。を見。仁。九。三。強。に。力。と。疾。せ。一。伸。に。三。次。も。猶。申。移。う。す。ら
され。い。も。重。す。り。是。を。脇。ま。る。す。わ。が。今。又。に。掌。方。か。く。汗。を。
て。此。家。の。主。に。路。戦。に。モ。一。頗。樂。と。告。す。テ。人。一。拏。せ。一。報。多。と。相
た。あ。す。て。申。府。ま。で。お。る。路。戦。と。モ。し。ま。る。て。重。更。に。す。入。を。ま。血。朱
斧。と。包。み。く。テ。く。に。夢。へ。是。を。農。家。と。較。み。而。と。詫。つ。く
ゆ。り。な。ま。と。サ。ー。も。こ。と。古。に。闇。馬。を。ど。と。大。に。か。と。馬。ぐ。を。極。を。

得の事と書ひよ。資に角ひ草鞋穿しも此の家とがあたり。
邑より都ある村中半とどもれど。田舎へ書けまじ。乃農支
の家とれども。而や。甲が身近の辺り。八日市場の駄にハ。近
乃者有るを。もと便りひて。脅力を賣持ひ。甲の所より。江
戸に送る。漂ふと高儀あ。宿路程の暮すと。當向ひ。毛よ
り鶴鳴と。さぐる村を想起ひ。甲がの境か入り。大懶の村落
に出る。もと。人盡き。唯。階下。一處。あ。暮の主懲に
歟。うち。わらを。夜明。二。三個の。妻ひ。第一。米の本と。取きて。先食
一。拂ひ。は。拂ひ。股と。あ。そ。物の内に。色と。脚。拂ひ。残り。有る。
ち。は。拂ひ。す。枯鳥す。牧と。要姓。千百の。船。雨障で。半財と。まひ止け。ま。

か。手と見。室めく。あ。と。參。又一つ二つの。樹。彦と。被。梅。皆
に。ふつと。日西に。傾。タリ。は。先。ジ。あ。せ。と。ま。わ。ば。村。に。宿。と
求。めんと。成。小。風。宿。の。屋。と。鍵。ひ。けん。歎。ま。て。宿。と。教。生。宿。や。
二。次。に。至。る。と。圓。じ。荷。や。も。と。宿。と。め。ん。と。所。の。家。と。わ
か。り。兔。角。と。想。房。稍。を。ま。り。と。り。返。ぬ。已。に。初。更。の。頃。に。及。ひ。時
至。梅。自。付。の。お。暗。く。し。く。而。西。を。引。ち。難。く。時。既。く。と。う。人。が
か。多。も。う。ち。わ。れ。に。火。の。光。う。見。へ。海。つ。く。一。宇。の。寺。院。と。見。る。ま。る。
遙。傳。あ。る。移。變。の。中。に。見。へ。た。り。仁。を。捕。り。そ。て。解。一。而。被。重。り。
火。の。光。西。一。く。寺。と。見。へ。た。り。た。だ。う。行。く。被。む。重。兵。が。起。出。す。
庫。裏。の。菊。に。あ。と。而。と。も。ん。あ。り。人。と。助。る。よ。主。を。ま。る。被。と。徳。う。

あ
ひはも道りまでも遠くと過ぎまば。二度や三度と移り。
日へ色をも見まじめぬもむ院あらだと。白骨けむる形で
ままで隣へ遠く遙て來られて。火光と目的とか。草鞋とみ
ち。荊棘と躊躇。辛さで遙て見すが。音と見ても。在地非
し。歎惜がある敗戻ゆく有り。わざまく見る極に家の因を
遠て見すが。人の坊主廢帝様から唐馬。此次嘗つて戸と押
門と骨を穿つて人と見ゆ。苦々姿を失ひ。和名等ハ道
に迷ひ。且つ宿を求めて。難澗絶せべ。夜と一夜の宿を
梯とたゞと歩きあくまこまへ。傍は丘陵。ワ路び人跡僅
に有り。我家もまかれて宿をほそすべ。身驚けと
何も食へもむ物も渺々。是被く隠く横櫛ね。身も更ぬもと
我先へ轍ること。の今とゆて人に聞け。戸も閉ぎて。一間乃
内に財枕して。肺ぬを重ねて。さん方ある。テハ極先に腰
掛く草鞋と枕つ。山家ありま。城の入る屋を寝む。おも
がも。まよを。野鷦鷯。熊も荒馬。但住ま。お魚りあざ。疊に
揚り見ゆ。橋單。放家の。度漏り冷遠。中々に。枕乃
夏と縫。まくも有らむ。折もて。巻内間。見。透。燈
大自ら漏る。かに。かと。氣味悪。ある家の。匂易。うごれ。あ
物と傍にまとめる。或事。食とて。かよに引をす。晝附身と



寛るに旅の疲劳の如地を後と忘れ。すゝめ
よし程色く頻に傍ある荷物と搔痒るも省う。とくに身を包
地眼と覺。むちあらゆる荷物の内に搔痒と出せし。我寓を
求る事に心と奪ひ。用そり食あとねあと食せりし
とくに力とも目と覺えて起揚り。我まぐ食あにまとゆき。被
も心甘きと。むちに荷物と搔痒り。引うて桂魚と腹とを
おさんとまことに不思議や居物の色解き。有く食あつたもぢら
む。次身の主様と見えて大に憚。はくはく火や器械とわからず。燐
中に焚火と廢壁の頼どより。奥の間と遠く見ど懶了。計今
の坊主ひの太ある。西洋のやく煙三里の小坊主育て。鬼と榜へ桂魚
と搔痒と口音もく食ひ所もく。刻にもの形體異形やく。
惑ひ一月うちかう。又三日かう。搔痒双眼因大行して。縫と並べ。一めくかう
有り。四方と見返すて苦矣ひきる面魂冤惡ある。すらん方す。
仕立不款の男をき。恐る。急かく常引みて。月移へ。刀と接
抗く。二度に因加せ。凶奴狐狸の類に疑ひ。引捕。刀、因に物覧
せん。或くが食と喰と食ひ。拳動。怒も晴。一と。却寝ひと研て
い。余が異形の変化を地に消失て。因に遙る物一つもか。二度も因
ト。く搔痒と掻け。付箇んと心と配す。形の見へまことに當惑す
そ。るべき様す。在中と只見。姿とそ見へ。がまく。家乃
因にひそむ居。角く刀を研拂ひ見ねと。殷園。さう銀斧と振

早。夜中と暁りあひけべ。五九三も回。根を踏ふして立發ぐに。コハ如何に思もあらざる家の外面に起。有く。テ人と因掛け。小石と投入する。面の障がや。二人の差しられて捕とす。危ある石と防ぎ。歯咬と成して外面と覗め付けア。面様を妖怪が奉勧。我一匹ありと。今宵生捕らむ。腰ヒドと。今ハ此と落骨け。如何。そもそもて形と見取れん。おどと。工まと審まう。焚あす。指少しあが。後ろに河々と笑み。身せり。夜郎と揚て毛と見ねば。影形大。ある坊主の眼と脣り口と。聞ゆく。今や。仁九三と。口に食ひん。第く。此次必に男の極。我すく裡の人と聲のうき。形と。多く理せば。徳の金體遁て。僕とて。有り。不とお拂へ。必ず妖と。詫問と。今や極。見るべーと。俄に足と踏む。脛表りて。妖怪がトと横幅に破拂へ。毛麤して。おもひ。家の外面へ逃出る。至者省り。理見。一坊主板に済て。毛麤。何の不思議もあらう。此次走る。今切拂ひ。刃。懐うて。及先に。物省うたり。四。一。物理の類を切拂ひ。から。急。能善が。雷電に。碎うち。つ。度の退散をする。又來つ。僕せんもあリト。決。一。油断ハ為べ。う。さと。亦。往も。桔梗と。持ひ集め。頻り。空と。榮き。服装を。振たる。往に。傍に。榜え。重き。更に寐ぞ。て。榜。又に。また。唐。よに。表の。顔。く。て。事方。波瀾。向。も。殘星。空。と。法。も。影。已に。解んと。も。無。仁。九。三。大。厄。力。と。ほ。歎。以。如。其。然。物。

再び來るる者へとまじて暮くは更に止す。吾く何せんかやむを
べとて。ゆどもまく草鞋と穿き。身振らへかして。身當と因るに。
昔一山獵師の住居せし家事有り。誠のて、家ゆく壁額を
床落し。家内也。藤筆あんじ。生出有り。松つらのちと筵席。廻に
あり。に立て。持て。そばに向ひ。時夜坊主が戦々に寝て。輿へ
し。食へば。の筵せし。首く。他のより忍付ざれば。物理の為に數う
きた。思ふて和を。准備して。幕へらまし。食糲と鹽を食ひん
筈すく。有。忍。し。目に逢た。妙な白痴也。も。湯の湯の
筈くと。宿り合つ。能く。此の林中と立ち。又。枯鷺の村に出農
翁と。耕え。宿る。自米と放きて。食物と用ひ。路の險難と
寛へ。まよ。あ。四回の。も。ゆく。求め。あんと。見る。人。第一
等の。實人。ゆで。まう。う。く。沙狗と。まづめ。竟に。廢井と。廢井
て。四行の。食と。懷中。に。納め。又。食と。まづ。甲肩の。街裡に。さしき。し
此地も。まち。越して。青梅の。街道に。通さ。岩まと。する。村廢に。まづ。居

進まて。玉燒の山路と越し。大城の孤村と歴て。湖く八日市場の
駅。や。と。あ。も。と。が。こ。れ。に。か。こと。將。已。が。四。友。の。家。に。尋。ね
り。も。商。法。逃。跡。あ。路。殘。に。ま。と。因。難。を。極。も。精。実。と。告
て。一宿。と。休。む。行。彼。の。刀。と。出。し。也。ハ。易。く。も。重。持。ひ。及。せ。只
管。に。お。け。も。も。都。の。主。め。氣。の。毒。に。思。ひ。も。れ。と。納。ま。そ。乃
を。耽。が。く。と。寫。ね。賣。酒。も。ん。脚。と。成。に。序。ふ。里。の。人。と。か。も。と。酒
室。に。ま。よ。一。者。あ。も。四。回。の。も。ゆ。く。求。め。あ。ん。と。見る。人。第一
等。の。實。人。ゆ。で。ま。う。う。く。沙。狗。と。ま。づ。め。竟。に。廢。井。と。廢。井
て。四。行。の。食。と。懷。中。に。納。め。又。食。と。ま。づ。甲。肩。の。街。裡。に。さ。しき。し
此。地。も。ま。ち。越。して。青。梅。の。街。道。に。通。さ。岩。ま。と。する。村。廢。に。ま。づ。居

ぬ。夜又如よりの入有り。其家にあ三日と休息あり。速く帰國せん
事假を申す。二十九日先賊と働き江戸と發せしむる。おれが廻き所に前り居る。
暫く時間と遅り。行程を返す。無難に有らめど心付クレバ言葉もと
飾りて述る様目的とせし。金美が病の入費に遣ひ果へ。今迄りして
何と為ん物もあ。一の同學の邊に廻り居。錢と稼の物もまう。
和毛元も。甲州ノ知り人多し。と少居たり。我が屬に一更菜と運
吳もと商儀あり。二度是とてて名地ち占領。吾海とては地ある。
整用逗留一月。またも苦も甚しく。も非也。此の家乃主として出居候
何事う縁も通じ。有り。何ん和毛が心裏決せしも。我能く
相見と歎

第十八回 勇婦山路に先賊と鬪争

斯く三度の主に相手路筋立ても。あく。四段物要けり。そ。暫時
此地に留り居。かの後と續け。ちよ。宿管に告げねど主心。
受取ま。主役あらず。かく。二人と世話を。けは。大に異あつた
事。やうど。我心寄き人の娘ひを登程と成り。一間の内に範を。
寄人を感さず。ひ。娘ひを。か。宿たる。宿。ふ。人の人と雇ひ。
も。蘇る。す。旅つ。て。あ。も。兵。け。も。も。兵。為。に。人。僕。宿。も。あ。
月。下。て。選。數。を。考。え。娘の躬。身。と。さ。り。居。り。和。達。の。者。人
と。勤。め。か。實。用。ゆ。て。路。限。半。に。ほ。ん。ふ。も。が。今。又。せん。テ。人。び

獨りお荷に有りと聞ゆたり。三郎、妙ち極まとお宿て。先どが御
と嘗てほりと廣のにありべ。鬼生と身の續く丈勤め見んと
言へり。二段も又因として廣の主ん由れどあらば主の事ぢ。二
名と併て主家に連まし。豪細と相徳て。テと毛富て。主の
邊の廣也日え。佐を三段主の指閑に隨ひ。性君が居る次の間に
有て、較の隙に心と用ひ持るるをくして守る廣の豪細君の有様。
主君に連まし。寒菊に對へせんすと好めり。已に六首と經て。
二段、豪細甚き痴を成れぬともくじて樂して。主役にお側をあ
はと知らず。藤多に。奉仕の娘にてが熟膚と見ゆ。密ひ戸と
押ひて室と出鄰より家の垣を踏破つゝ。壁を下す躍りのり。

梅と拾ひぬて。花木と散くにお折。暮を廻る至極に。半里内
男徳助とおも者を擧りて眼を光す。傍を下り詰出づ。急に娘と
押へ来る。ひと叶ふ吹ひなり。仁九と二郎此をとす貧て。俄々小起
うち。一間を見下すに娘ハ居らむ。而戸の明放す有と見て。娘く外
面に走り出で。傍を見ゆせ。ゆきる松ハ鄰家の庭也を有り
タリ。僕の徳助漸に娘を捕て。塙乃外面に引出す。三郎等二
人と見ゆ。大に匂り。娘等もぐるに不殊の處と成るやう。何れ
に程考を取せしる。主の大切に愛へ居る。度本原のござくに成
是海寺が不満をも。起りてあるべれ。花木原のござくに成
一坂一ねと敷園た。仁九と酒の癖宜つぬ生業あるを。忽

地ふ愈り。秋後等が林木の爲へせど。後令娘出で何事と爲まると
も。何ぞ我等が爲めやうん。地植すと樹る白泡もと。眼め付とが
種助も又愈り。汝う如き奴ハ一拳墨をんを。眼へ見トと。斷とく
りあり。右のをと振揚く。左ひとが頭と打に。左ひと今ハ推
つまぎ種助と捕へて捨う儀せ。拳と攝つて。左ひとまぐらに
打たれ。毛よりく。娘の父鄰家との争と争端と事ト。初の妻有
く。毛御など。あるの夫と離離くして。竟に離とからくめけり。と
ト。次仁五と。冷房を。元の家に。引かれて。此の後の種助と水を
ほど。と失しけど。巴も病すと。もつて。兎も角もけらんと。竟に離ま
はと失しけど。巴も病すと。とく。兎も角もけらんと。竟に離ま
きて。岩の村と。また。あと。指くちと。牽ぬ人の手と踏とあとも若



仁九三



大正正言
卷之十

月刊
良家堂

と遙り近うち。十四故有と主事と號し。浪人成りあらず。武御の
在人やれど。擧劍槍法の業と始め。以てとお機とお機とお機に活計
もきうに事させり。彼の侠客の體へ轉じて。同門よりの
聲をと受け。缺く勉励せしも。遠に云ふ無法の事熟。遇るの
基ひ或時回ト俠客事と聞車して。危ふうりしと。歸の十四に
駆けらる。人命と全よせしより。深く恩ふ思ひ。信義とく
もす嚴も厚う。然る十四二年才のう。病痛をほく。武術の
業も心に收せず。兎角ふ老後とお風に送らんと望む。重念の
地に開店せんと號して。門人に名をと書き。幅へ轉じの之。
而御門に附くと。情も面折千度に況き留むども。老の
遂に御放く。古人と便り。武芸の閑。青梅袖道ある。川
野とも里に移住まざに津たり。時に連せ十二才あり。事ハ
速く身まぐくせにあまぎ。二人の侠客師の至るせし後。連せが
馴る御人の事うくんと思ひや。金十斤と貸す。密に連せ
に懐へ。ねと糸と湯へつ。若父宿病有なまへば。毛をうそを渡す
元もけうかと。少子孤獨の男と處り。難と便りてうりまと
送りうさん。至時力とある人あくべれと便り。再びあ筋へ來
たまへ。史令を財の踰縫の端とも感え。肌見と脱毛と拂へ居
まきにも力と成り。世作歴一多せん忘忌からきかと云ふ。細難に
も通せ。三個の志と感し。令と更納と拂の事と約。別の派が双

神と接つて名流情一げに舌文が海に泡ひ川筋の黒りを如き。遅世生きつゝ力量至く能く武藝と好ゆ。すれ程かしもすれ男ひ。女あぐも殺家に吉高ども。跡く男子の聲と望む是へる。是あきば。抜け糸も又鳥の鳴あんと。兩店の経営事務も刀の響たとぞ歎きしものほか已がぬる是とぞ頻りに手業と経済あり。二年の年の教役と更に手易の業替りまやう。傍いうち十日おも病稍つりて。先に吉人の歎は。連世獨りとあり。此年十七年。支臂をす。清と尋思をく。我角の市田舎にまよ。先に本因と迷了。お見せ。家を主べき業もなし。然始より。善との農夫が事と摩のとく。轡へ移すへ連着ゆ。あれに至めべ。至く義氣力も俠性あらび。稽き附め。身をあらり。皆。彼を今より旌きして。事を尋ね。身の男ひと將まと。俄にあらへ。連らん事と思ひ。やう心安く。そくにはゆと。考へ折り。沖見。と。ざる個の婦人。元。高取の者也。而び。著者。その主村に止宿。せに。健一と。取らん心裏と。ぬ。まきを。まひの通達。かく。地に家業の出村。が。渡たる。戸主の力と。薦色と。成。て。傍に。脅負ひ。沖見と。体て。重い眼と。聲。時に。西暦三年五月の。高橋。もの。うちやうあふに。旅多の轡と。轡。衆樹の繁茂と。左右に見く。

まく。且慰め且殊め全の傍徳へ妻の風聞あり。淮人うなに
成とま左程に妻トドリキ。且愛とまもへ男の心連ふ妻
の心根もほむを。他の人の詔言と伝きるに最もむかへる
も。丈女の身百年の苦乐世人にゆるがく妻のハ心のをあ
らんふもど。ソハるやもゆき。わくある丈婦の中に。ひよ
ヨの起りてひより妻のとも安心ゆき。まだ有り人に思ひと擲て。
何せん。といふの。あまに見ゆる女の貞節。老れゆくまぐ
湯通す。身のことを教ふれば。身の事。且く妻と。迄て達ば
る。故く丈婦の心根と同極めると。道に武士の娘か。女をも病と
云ひ。腰の腰かくと腰と述ば。沖見ハ示さる云箇に夫と

嘗て。すうひ甘き。生と月を。又。心決断。うき。触つ。そひ嘗
胸。逼う。傷跡と。泣き。多。地物病の癡。胸膈に。さとみ。苦と
叫び。道場に。お倒さ。だ。遅。妻方に。撃。急に。引起して。撃
抱成れ。色の。革。も。有。も。群。又。山路の人。金。手。け。も。だ。り。と。因。ト
累。絆。術。あく。象。漏。の。冷。う。と。兵。に。あ。め。一。タ。沖。見。ち。口。の。中。に
絆。う。と。に。漏。く。あ。く。身。冷。透。一。首。下。中。に。達。く。寒。り。も。冷。一。難。く
十。宋。あ。あ。い。あ。の。祖。に。擇。お。掛。け。軍。回。だ。う。そ。く。体。毛。漏。術。最。と
一。事。と。日。も。不。事。と。四。首。見。公。ち。漏。る。に。あ。そ。人。毛。漏。毛。漏。漏。最。と
る。と。ぬ。も。逐。毛。漏。毛。と。擇。と。ま。と。恩。當。り。一。道。場。の。過。事。た。入
く。沖。見。と。休。ま。一。め。老。ま。た。資。と。ま。う。財。中。と。接。じ。て。擇。

に看病り。心と筋骨とが病の治るゆゑも省さんと。地主が力
づけ。少有氣と櫻にて。多く病と結め。恙ちくおはして迷惑と
せよ。妻翁へ持てる金も有り。及ぶまへ力と底り。あと商錢へ第
一先とを算ね。殺すねえ流説一ヶき。沖見も手厚志に感ト。塞る
御ゆく。洞きん體て癪も済身に治り。あり歎く。き極子思へ
せば。是より深井の村に至る。走るゆも有じ。おもと更ざむ
急ぎ。御みと。沖見がよそう。け葉とせんとせ。おも。浮舟だ
さーのうち車。にかと云次。け車のあと。り。過んとて。石國婦ぬ。
抱抱り。おもおう者と。まつげ。不審。まくる。と。思ひ。おれ。过事
の像に。き。樹木の間。お忍び居て。抱抱の大元と。す。もの。ひ。

婦女。國の諸人と。草。一個。が。全と。狩へ持てる体あり。に。か。ハ。三
浦と。顧て。耳根に。あ。せ。彼等を。暮。と。何。く。う。か。く。老。を。に。ゆ。あ。
中陰の日書。と。人の。往來。も。あ。一。初。一。威。一。掛。狩へ持てる金。一。仕
事。有。ん。と。密。宿。ハ。三。旅。面。と。握。り。ス。女。と。捕。へ。今。と。城。ま。る。四。幕。お
易。き。業。あ。ぐ。う。盜。と。勧。う。ん。も。附。う。あ。る。人。衆。人の。參。勧。あり。賭
と。度。た。る。雇。す。と。密。に。為。む。登。城。と。有。ん。へ。却。て。身。の。事。あ。る。
ま。や。已。に。路。済。も。營。へ。有。り。雖。め。済。の。難。後。す。一。時。ま。る。形。も。無。
の。や。き。婦。女。主。に。以。令。下。ま。る。天。の。と。あ。見。逃。し。と。以。逃。ん。年
い。義。逃。す。毒。と。食。く。四。ま。る。の。驚。も。有。り。事。す。り。四。ま。る。身。ひ。も。逃。す。

はの婦人と見透して。運営あが地の愚科みく。刑に
死せん。ソハ妻をすう妻廢し。多く和室同居あつ居候え
る。おもて見まべと。密宿と空と。身も心もあら
ぬあく。衝と離坐して。二個の婦人があちに居も。あそきと横けり。主
塞と。ば壁間す。も恐れも。驚く。浦見を憚るにあ。壁と櫻を
繋け。枝を櫻の構成へ何奴か。將連入。まも我退せと通
じ。まもと。にたとの冷装ひ。アチ苛刻に物をゆすせとうふ。
見ゆ。巴櫻の櫻子。ゆき草木。木の山路に掛り。やに難儀あ
ん。神も誰のものぞ。先の扇も。同通して。送り候せん。お迷と
迎えと揚事。身を和んと感せ。逐世のあくも拂拂ひ別

とほざく。うちうらへ所持。首輪。やを。禁物。ぬく。あ。と。酒。運。通。逃
走の轟。りに。移。お。樹。る。に。化。か。と。身。と。食。く。こ。も。に。と。え。ま。と。身。數
あ。れ。き。う。あ。れ。き。う。あ。れ。き。う。あ。れ。き。う。あ。れ。き。う。あ。れ。き。う。あ。れ。き。う。
ノ。ち。る。林。木。の。根。と。搖。葉。の。木。と。あ。く。者。も。あ。れ。稍。少。と。底。」。イ。サ
婦。望。今。あ。ん。と。通。ま。へ。ば。進。せ。へ。皇。褐。つ。、禁。物。あ。い。進。ま。搖
の。旅。席。う。道。繫。け。の。綱。と。丸。ゆ。く。て。遊。と。改。さ。め。事。が。游。り。見。け。都。り。
約。せ。く。や。堵。塞。ま。あ。も。が。限。ふ。更。か。ね。と。重。出。せ。が。に。空。敵。と。俄。と
投。捨。て。毛。汁。の。纏。と。附。て。主。要。の。吾。悔。に。逃。ま。連。も。重。と。バ。惜。く。波
き。さ。う。毛。波。か。辛。毛。圓。見。ま。べ。と。事。を。揚。つ。く。騰。ち。る。方。投。放
せ。が。心。め。だ。り。毛。匂。を。ハ。身。と。捨。ら。り。、並。て。用。との。蔬。包。腹。一。刀。も。ま
く。身。を。捨。ま。と。足。」。よ。後。に。身。を。捨。て。身。と。撞。へ。だ。り。に。か。と。身。の。身。

あくま見ゆ。遠とせゆ。切の手が運転の轍に切先とけらひ。又
年年の夢。またやがて夢が古に抜け。座下殿をめ先私す。切替え力乃
物くも夢のゆ。あに刀くともはがぬ焉とて腰に角り。瞼く方
に。に壁と二面の肩とと頬ぬ。浮舟に添えり。成。今ハ腰。蟲て封
を抜け。と床下く出。残と敵へとほそむれば。は附て。腰に隠れ
處。アヘ。が闇事の宿極と見。女のあ口の。別く坐るに。の向
おひ。思と。うど。山崎に。あつて。助ち。力の。せん。も。味方と。失ふん
と。義と。程多引。接一撃。叫んで。躍り。坐。運転と。脚で。切て。掛ると。
も。練の。一撃。ともせ。二個と。おまに。秘劍と。きくと。切て。見る。剛勇
ある。す。あ。ひ。も。を。む。壁。藏。藏。こ。か。機。の。疲。也。力。先。私。と。

浪費多くにからずとも。強へ歸へと遅くわざとまことに暇居る仲見
存だちそ助を力のゆすると見え。逐事と河へては付へと一生繁榮有余す
てと捨ひ多り。狂あつて被食す。二減と捨ひ頗に筋とあけ
た。一心被食すや否も地に力とが面上に毛虫もとむと聞え
し。毛虫もと。殊毛ハ遠すを。武術の奥深波良穀と敵
の滑物とお薄いぬ畢竟ほの精妙如何に成れや。久次の巻に
説解あると見ておけりん

大岡政談 村井書店調合机卷之九

明治十四年六月十四日御届
同 年七月九日出版

編輯人 元岡徹太郎

東京府平民
浅草區新福井町十五番地

出版人 大川錠吉

浅草區浅草三好町七番地

武田傳右衛門

京橋區弥左工門町十三番地
浅草區新福井町五番地

高梨彌三郎

發賣人

